

英語の非制限関係節について

主節か、それとも従属節か

戸澤隆広

1. 導入

(1a)に例示される非制限関係節には二つの分析があり、(1b)と(1c)に示される。

- (1) a. He has two sons, who work in publishing.
b. He has [_{DP} [_{DP} two sons]_i] [_{CP} [who]_i] [_{t_i} work in publishing]]
c. [_{CP₀} [_{CP₁} he has [_{DP} two sons]_i]] [_{CP₂} [who]_i] [_{t_i} work in publishing]]

(1b)では非制限関係節が先行詞の DP (two sons) に付加し、DP と構成素をなす。非制限関係節が DP に埋め込まれた従属節であることから、この分析を従属節分析と呼ぶ(Jackendoff (1977)などを参照)。一方、(1c)では非制限関係節が先行詞の DP と構成素をなさない。この分析では、非制限関係節が主節であって、文が二つの主節 (he has two sons と who work in publishing) からなる。これを主節分析と呼ぶ(Ross (1986), McCawley (1998)などを参照)。これら二つの分析には経験的証拠があり、何れの分析が優れているか明らかになっていない。本論では、非制限関係節が主節であるという立場のもと、非制限関係節の Parallel Merge(PM)分析を提案する。この分析では、主節分析だけでなく従属節分析を支持する事実にも説明が与えられることを示す。

2. 理論的枠組み

本節では MERGE の理論を概観する。まず、Workspace(WS)を仮定する(Chomsky (2020)を参照)。WS とは構造構築を行う場所のことであり、WS には文の構成要素が含まれる。例えば、“John loves Mary.”という文では、語彙項目の John, loves, Mary などの統語対象が WS 内にあり、二つの統語対象が結合することで構造が構築される。次に、言語機能は Recursion の特性を持つと考える。Recursion とは WS 内のすべての要素が併合にアクセス可能とするものである。例えば、WS に John, loves, Mary が含まれる場合、John も loves も Mary も併合にアクセス可能である。WS 内の要素は併合に可視的だが、ここで併合を(2a)のように定義する。

- (2) a. 併合は WS を WS' に変える。
b. $WS = [a, b, c] \xrightarrow{\text{MERGE}} WS' = [a, \{b, c\}] \xrightarrow{\text{MERGE}} WS'' = [\{a, \{b, c\}\}]$

併合は WS に適用される操作であり、それは WS を WS' に変える。例えば、(2b)のように WS が a と b と c を含む場合、この WS に併合が適用され、WS' が得られる。この WS' 内に集合 {b, c} が新たに形成される。WS' にさらに併合が適用されることで WS'' が得られ、集合 {a, {b, c}} が形成される。この意味での併合を MERGE と呼ぶ。MERGE に課される条件として「併合により WS 内に新たに加わるアクセス可能な要素は最大で1つまで」というものがある。(2b)の派生はこの条件を満たす。具体的には、WS に a, b, c の三つの要素があるが、Recursion により WS のすべての要素が併合にアクセス可能なので、アクセス可能な要素は三つである。WS に併合が適用され、WS' が形成されるが、WS' は新たに形成された統語対象 {b, c} を含む。その結果、アクセス可能な要素は a, b, c, {b, c} の四つとなる。WS' に併合が適用され、WS'' になるが、{a, {b, c}} が新たに形成される。その結果、WS'' でアクセス可能な要素は a, b, c, {b, c}, {a, {b, c}} の五つである。このように併合が WS に適用されるごとにアクセス可能な要素が一つだけ増えることから、(2b)の派生は当該の条件を満たす。この条件は PM(PM については Citko (2005)を参照)を禁止する。(3)を考える。

- (3) $WS = [a, b, c] \xrightarrow{\text{MERGE}} WS' = [a, \{b, c\}] \xrightarrow{\text{MERGE}} WS'' = [\{a, b\}, \{b, c\}]$

WS' でアクセス可能な要素は a, b, c, {b, c} の四つである。WS' に PM が適用され、a と b が結合するとしよう。そうすると、WS'' で {a, b} が形成される。その結果、WS'' でアクセス可能な要素は a, c, {a, b} の b, {b, c} の b, {a, b}, {b, c} の六つとなる。WS' から WS'' の写像でアクセス可能な要素が二つ増えるがこれは当該の条件に違反する。従って、PM は不適格な操作となる。

3. 提案と分析

本論では PM が対併合である限り認められると主張する。(4)を考える。

- (4) $WS = [a, b, c] \xrightarrow{\text{MERGE}} WS' = [a, \{b, c\}] \xrightarrow{\text{MERGE}} WS'' = [\langle a, b \rangle, \{b, c\}]$

WS'でアクセス可能な要素は a, b, c, {b, c}の四つである。WS'に対併合の PM が適用され、WS''で順序集合<a, b>が新たに形成される。ここで、Kitahara (2019)に従い、対併合した要素は併合にアクセス不可能であると仮定する。そうすると、順序集合<a, b>において、対併合した要素の a と b は併合にアクセス不可能となるため、WS''でアクセス可能な要素は b, c, {b, c}, <a, b>の四つとなる。WS'から WS''への写像でアクセス可能な要素は四つのままである。従って、(4)の派生は当該の条件を満たすことから、対併合の PM は認められると主張する。この主張に基づき、本論では(5a)の非制限関係節を(5b)のように分析する。

(5) a. Yesterday, we visited the Capitol, which I'd never been to before.

b. [CP Yesterday, we [VP visited _____ [DP the Capitol]]]

[CP [CP which I'd never been to before]]

(5b)のように非制限関係節の CP と先行詞 the Capitol が対併合の PM により結合する。PM により the Capitol が主節の動詞 visited の目的語であると同時に非制限関係節の付加詞となる。また、PM により二つの root の CP(主文と非制限関係節)が得られることから、非制限関係節は主節となる。この分析を PM 分析と呼ぶことにする。

4. 帰結

本分析は従属節分析を支持する事実を説明できる。(6)を考える。

(6) a. What Mary likes the most is dancing, which unfortunately doesn't appeal to Roger at all.

(McCawley (1998: 449))

b. [CP what Mary likes the most [VP is _____ [DP dancing]]]

[CP [CP which unfortunately doesn't appeal to Roger at all]]

(6a)の疑似分裂文の焦点要素の名詞句 dancing が非制限関係節を伴って生起する。この事実は非制限関係節が名詞句の DP に埋め込まれている証拠、つまり従属節分析を支持する証拠とされてきたが、本分析では、(6a)は(6b)の構造を持つ。焦点位置の DP と非制限関係節が対併合の PM によって構成素をなす。従って、DP が非制限関係節を伴って焦点位置に生起できる。

また、本分析は主節分析を支持する事実も説明できる。(7)を考える。

(7) a. There is then our father, by whom will we ever be forgiven for what we have done? (Cinque (2008: 111))

b. [CP there is _____ [DP our father]]

[CP [CP by whom will we ever be forgiven for what we have done]]

(7a)で、非制限関係節が Yes/No 疑問文として振る舞い、主語助動詞倒置を引き起こすことから、この事実は主節分析を支持する。本分析では(7b)のように、対併合の PM により主節の CP と非制限関係節の CP が得られる。非制限関係節の CP は root sentence のため、主語助動詞倒置が起こる。

5. 結論

本論では対併合の PM は認められると主張し、非制限関係節の PM 分析を提案した。この分析では非制限関係節が主節と考えるが、主節分析を支持する事実だけでなく、従属節分析を支持する事実にも説明が与えられることを示した。本論の主張が正しい限りにおいて、PM は文法理論から完全には破棄されない。

参考文献

Chomsky, Noam (2020) "The UCLA Lectures." <<https://ling.auf.net/lingbuzz/005485>>

Cinque, Guglielmo (2008) "Two Types of Non-restrictive Relatives," *Empirical Issues in Syntax and Semantics 7*, ed. by Olivier Bonami and Patricia Cabredo Hofherr, 99-137, CNRS, Paris.

Citko, Barbara (2005) "On the Nature of Merge: External Merge, Internal Merge, and Parallel Merge," *Linguistic Inquiry* 36, 475-496.

Jackendoff, Ray (1977) *X' Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.

Kitahara, Hisatsugu (2019) "(Head-)Adjunction by Pair-MERGE," paper presented at the workshop "Pair-Merge under MERGE" in the ELSJ 12th International Spring Forum 2019.

McCawley, James D. (1998) *The Syntactic Phenomena of English*, 2nd ed., University of Chicago Press, Chicago.

Ross, John Robert (1986) *Infinite Syntax!*, Ablex Publishing Corporation, Norwood, New Jersey.